



いのちの川

第3号(2014年5月)

<http://nssk.org/province/genpatsugroup/> (ホームページは日本聖公会管区事務所の諸委員会からリンク)

フクシマから福島へ…

原発と放射能に関する特別問題プロジェクト
運営委員 越山健蔵

あの震災から早いもので、三年の月日が流れました。人々の関心は東京オリンピック、消費税、経済の動向…に集まり、負の遺産福島は切り捨てられようとしています。3月11日の各紙が震災からの三年目の節目をどのように報道したのか、全国紙、地元紙6紙に目を向けてみました。驚いたことにそこには復興、希望、元気の文字が躍っていました。悲しいかな、未だ5万7千人余の人が故郷を追われ、深呼吸も出来ないほど狭い仮設住宅での生活を余儀なくされている人々の報道は、紙面から見事に消えていました。

何をもって復興・復興と言うのか、時間の経過とともに、さも日常が戻って来たような錯覚を覚えさせられています。私はいわきと郡山に住まいしていますが、いわきはもう前と変わりませんね、よかったですねと言われます。返答に困ります。郡山にしても同じような声が聞こえてきます。一見何事も無かったような光景が目の前に広がっています。放射能は臭いもなく、色もなく、痛みもなく目には全く見えません。

三年前の3月12日～14日にかけて福島第一原発が3回の水素爆発を起こしてから、福島の人々の生活は一変しました。単に生活が一変しただけでなく、人と人の関係に取り戻すことの出来ない深い楔が打ち込まれたままになっています。避難した人(避難できた人)、残った人(残された人)の間で、言葉では言い尽くせない葛藤が今も続いています。一度崩れた関係を修復す

るのは、以前の関係が深ければ深いほど困難です。三年が経過して、どちらが正しくて、どちらが悪いという答えは永遠に見つかるとは思えません。また三年が経過した今、そこに留まることは虚しい結果しか生まないようにも思うようになりました。一見何事も無かったような日常の挨拶の中にも、微妙な空気の乱れを感じます。長い年月をかけて人と人の深い関係が作られて、強い絆を信じていた関係が、原発の爆発を契機に一瞬にして崩壊していくのを目の当たりにした体験は、到底私の脳裏から消えることはありません。

それでも、人は関係の中で生きていくしかありません。多くの悲しい出来事が闇に包まれたままです。人間って悲しい生き物だと思えます。最近教会の周りの道路の除染が本格的に始まりました。除染している人たちはマスクで顔を覆っていますが、マスクの影からよく見るとほとんどがあどけない顔をした地元の青年たちです。側溝のドロを軍手一枚で掻き出していました。日本聖公会には放射能に対するコードがあります(三年前に「いっしょにあるこうパート1」で決められたもので今も生きています)。30歳以下の女性、40歳以下の男性は長期間ボランティア活動を高線量地域ではいけないという取り決めです。かって、この件でかなり激しい議論がなされました。現実にはいわきでも、郡山でも幼稚園児達が、また若い先生方が生活しているではないか、クリスチャンだけが助かればいいのか、むしろこういう時こそ信仰が試されるのでは、「友のために命を捧げるのは愛の証、主イエスの一番のメッセージではないか…」といったような会話が今も頭

原発と放射線汚染に関する特別問題プロジェクト

いっしょに歩こうプロジェクトの活動方針と 2012 年日本聖公会総会決議「原発のない世界を求めて」に基づいて立てられた委員会です。

運営委員：司祭野村潔(長) 司祭岩城聰 司祭越山健蔵 司祭笹森田鶴 宮脇博子

事務局長：池住圭

福島県郡山市麓山 2-9-23

電話 0249-53-5987 fax050-3411-7085

にこびりついています。「郡山で子育てするのは緩慢な殺人行為だ」という声もありました。幼稚園も休園するか、否か（当時20ミリシーベルトまでは安全ということを経済大学のY先生が提唱し、国もそれに同調した経緯がありました）で激論が交されました。いまはそのことに敢えて触れないように努めています。三年が経過し結果的には、園児の半数が退園していきましたが今幼稚園は園庭を人工芝に替え、出来る限りの安全策を園一丸となって努めてきた甲斐もあり今年にはほぼ例年と変わらない園児が入園しました。結果として休園しなかったために、今があるのかもしれない。子どもの命をどう守るかということについては真剣勝負でした。しかしその評価は今もできません。さまざまな葛藤を乗り越えて今の平和があるなんて格好つけることはやはり正直できませんし、まだまだ時間がかかります。また全国の教会からの支援、

励ましにどう応えていいのかわかっています。福島は三年目を迎え、疲れがピークにきています。どうして欲しいのかと言われても返答に苦慮するのです。今回苦しい思いを出を告白することには正直ためらいがありました。それでも福島の人々が今も背負っている、背負わされている現実を知っていただき、少しでも寄り添っていただければ感謝です。ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ…という表現には戸惑いをおぼえます。私たちは今も福島に生きています。

2014年4月5日
郡山聖ペテロ聖パウロ教会
小名浜聖テモテ教会
牧師 司祭・越山健蔵

郵便振替口座 00120-0-78536
口座名 日本聖公会
「原発問題プロジェクトのため」と明記して下さい。

訂正：『いのちの川』第2号1ページの右側13行目から14行目まで「4号機からの取り出しと搬出は終わったものの」を「4号機からの取り出しと搬出は始まったものの」に訂正いたします。まだ搬出作業は進行中です。お詫びして訂正いたします。

折紙あそび(セントポール幼稚園 2014.3)



週に2回の楽しいお茶の一時(ほっこりカフェ 2014.3)



震災後3回目の小名浜聖テモテ幼稚園卒園式(2014.3)



週に一度、仮設住宅にやってくる日用品の移動販売車。住民にとってはなくてはならない(2014.2)



「帰還」の影響について

東京電力福島第一原発事故から3年が過ぎた今、国の線引きによる賠償、支援策の格差が、避難している住民の間に複雑な感情を持ち込んでいます。「帰村」から2年の川内村は、村が原発から20^{km}で分断され、賠償で大きな格差がつくられ、住民の心まで分断してきました。原発から20^{km}圏内の居住制限区域・避難指示解除準備区域と30^{km}地点の旧緊急時避難準備区域では、賠償に大きな格差があります。旧緊急時避難区域では、○1人月10万円の精神的賠償は12年8月で打ち切り。○就労不能賠償も12年12月で終了。○宅地、建物、田畑への賠償なし。○昨年末、政府が打ち出した早期帰還者への90万円賠償についても対象外など、ほとんど賠償がないのが実情です。同じ地域で、道路一本を隔てて賠償に差が出ている現状もあります。線引きによる格差は、賠償だけでなく、避難に伴う自宅の廃棄物処理も、20^{km}圏内は国が持つものとして無償ですが、圏外では、例えばタンスを処分しようとする、1個1.120円かかります。また、政府は、今まで行ってきた、旧緊急時避難準備区域の国保税、介護保険料、医療費一部負担の減免も、10月から一部住民を対象外とする方針で、今度は、同区域内にも格差と分断を持ち込もうとしています。20^{km}というのは、放射線量をみる上でのあくまでも目安の線であり、賠償や支援はそれにリンクせず、村や町単位で不公平感の出ないようにすることが大事です。

2014年4月1日、田村市都路地区に設定されていた、避難指示が解除されました。原発から20^{km}圏内の旧警戒区域に指定されていた11市町村で、初めてです。都路町（みやこじまち）に住民登録をしている

のは、約1,000世帯約3,000人、避難指示解除がなされた都路地区では2月末時点で117世帯350人、全員が避難生活を送っていました。その内

即時帰還は、都路地区に長期宿泊していた27世帯90人などの一部と見られています。多くは高齢者です。避難前には、3世代で普通に暮らしていた家族が、放射線量に対する不安で、特に子育て世代が「戻らないことを決めている」人も多くいます。また、買い物や医療等、避難前と比べた不便さから、帰還をためらう声があります。政府は、13年11月1日の避難指示解除方針を、一旦示しましたが、放射線量を不安視する住民の反発を受け、撤回した経緯があります。国直轄の除染は、昨年6月に終了、年間積算線量も市内の他地域と同程度と強調し、面的な再除染は行わないとしています。区域内には再除染の長期目標である年間被ばく線量1^{msv}（毎時0.23^{μSv}）を上回る場所が残ります。追加除染や森林除染を求める声も、住民から出ています。

政府や自治体は、声高に「帰還」を促しています。それが「復興の第一歩」とも。帰還を歓迎し、従来のコミュニティーの回復を願う住民がいる一方、「解除への認識の違いが新たなあつれきを生んだ」と連帯感の喪失を懸念する声もあります。戻る人への支援はもちろん、戻らない人への支援も十分に行うことが大事です。みんな好きで帰還を諦めたわけではないのです。今後2年ほどの間に、他の県内6市町村も、解除を検討し、計35万人が帰還するかどうかの判断を迫られるわけですが、川内村の遠藤村長は、「普通の生活を取り戻すのが、何でこんなに難しいのか。目に見えない放射能、原発事故の影響は計り知れないものがある。」と。このことが福島県民の総意であることは確かです。（西間木美枝子）

しゃくをげ (時局コラム)

「フクシマの嘘」

ドイツのZDFテレビによって、「フクシマの嘘」という番組がシリーズで制作されています。ヨハネス・ハノ監督は、福島双葉町で元双葉町町長井戸川克隆さん、京都大学原子炉実験所小出裕章さん、泉田新潟県知事その他に直接会って取材をし、様々入手困難な資料も手に入れ、3.11 原発事故のずっと以前から、現在に至るまで、強大な力の隠ぺい、詭弁、脅迫によって、いかに原子力発電の真実(危険性)が葬られてきたかを伝えています。(2014.03.01 公開 YouTube) 日本のマスメディアが伝えていない真実を、海外メディアによって知ることができるという訳です。その中で一貫して伝えられていることは、日本ではずっと長い間、原子力カメラによって、権力から遠く弱い人間が結局、苦しみ、窮地に追いやられ、命の危険にさらされてきている、という具体的な事実です。原子力カメラというのは、原子力発電に関係する電力会社、電気事業連合会、関連企業、プラントメーカー、経済産業省をはじめとする監督官庁、原子力技術に肯定的な大学研究者、マスコミ、業界誌などを指しています。強大な力だと誰でもわかります。キリスト教会が、この問題に無関心でいる訳にはいきません。神様のいのちを継承し将来を担うこどもたち、孫たち、ひ孫たち・・・のためにも。(margaret)

韓国の原発を訪ねて

昨夏、韓国南部慶州において日韓聖公会青年セミナーが開催された。東日本大震災及び福島原発事故後 2 年の空白を経ていた。テーマは「ゆこう、核を越えいのちの世界へ」。交流とともに、韓国の原発事情と彼の国の反原発運動について学ぶ機会を得た。何分専門的な見識を持ち合わせておらず、断片的な情報となることを憂慮するが、ここに記憶の整理も含め少し書かせていただきたい。

今回訪問した慶州は、一般的には古代新羅王府が置かれた歴史都市として知られている。趣深いこの都市は、一方で原発都市の一面も兼ね備えている。韓国南部の東海（日本海）に面する一帯には韓国最古の古里原発や月城原発などが林立している。特に古里原発の半径 30km 圏内には韓国第二の都市釜山があり、事故発生時の被害は計り知れないものがある。古里原発や月城原発を含む一帯は「原発銀座」とも言うべきもので、古里原発には総計 12 基もの原発がつけられ、その密集度は世界最高である。この古里原発は度々事故を起こし韓国国内で問題視されている。最近では 2007 年に定期点検中の原発で外部電源が喪失し、さらにその事実が 1 ヶ月にわたって隠蔽されるという事態が発生している。韓国でも日本の「原子カムラ」のような利権集団があり、原発を取り巻く官民一体となった種々の不正がおこなわれているという。そのようななか、2008 年には 1978 年 4 月に商業運転を開始した韓国最古の原発が、2017 年までの延長運転が決定された。

韓国の原発には日本にも多く存在する加圧水型原子炉に加え、CANDU と呼ばれるカナダ製の旧式のものも存在する。これは冷却時の原子炉の安定性が脆弱であり、冷却水の注入や非常時の電源供給等に相当な安全設備を必要とする。しかし、物理的な問題から必要な安全設備が整わないままに運転が続けられているのが現状である。

さらに、日本とも共通する問題であるが、やはり核廃棄物の行き場は大きな問題である。2010 年に慶州内に竣工予定であった核廃棄物処理施設は、地盤の不安定さが判明し延期されている。万が一の事態を想定した際、韓国国内のみならず、海に放射性物質が大量に流出し近隣国に影響が及ぶ恐れもある。

韓国国内で起こっていること、想起し得る事柄は、すでに日本がフクシマにおいて経験してしまったことが多くある。しかし、事故を受けての国際的動向に反するかのように韓国政府は原発推進政策を強行している。これに対し、「脱核」のキーワードで福島原発事故以前からおこなわれてきた反原発運動も「核なき世界のための共同行動」が結成されるなど広がりを見せている。またキリスト者の間でも「核なき世界のためのキリスト者の連帯」が結成され、「いのちを守る」観点に立ち反対運動を繰り広げている。さらに、韓国内 45 の地方自治体首長による「脱核宣言」もだされている。このように、多くの事故を引き起こしてきた原発に対する反対運動は草の根で広がってきている。しかしながら、世界唯一の原爆被爆国であり、福島原発事故を経験した日本国民と比べ、韓国内の原発に対する世論には肯定的なものも数多く存在する。原発が科学発展の単純な成果であるだけでなく、古来人類の生存摂理、神の啓示に反し、人類滅亡にまで導きかねないものであることは、最早疑う余地のないものである。同じ海を共有する日韓。生命の宝庫に支えられ生きている我々両国民。原発についての正しい知識を得て、「脱核」そして未来への新たなエネルギー転換を、国際社会との帯同の中で両国が手を取りあって進めていかねばならないであろう。

（日本聖公会京都教区 浮田 倫太郎）

